

# 現場へ!

## 縛る看護 もう見過ごささない

向き合う人たち②

人を縛る。自由を奪う。

ふつうなら許されない異常なことが、認知症のお年寄りに対しては「安全のため」などの理由で、医療や介護の現場では長く、あたりまえのように続けられてきた。看護師の田中とも江さん(71)は

日本でもいち早く、「縛らない看護」の旗を掲げた人だ。1986年から現場で工夫を重ね、改革の先頭に立ってきた。私が初めて会ったのは26年前。「縛ったら病院は牢獄になる」と訴え、「できっこない」と医療関係者に変人扱いされ

てもへこたれなかった。同世代が引退する中、今も施設長を務め、現場や大学で講演を続ける。なぜ、今も? 力の源は何? 「理不尽な有り様を見てしまっ

ている人がいる。発信し続けたいと許されない」。田中さんは若き日の「卑怯な自分」を忘れない。

今もあの痛みと光景を忘れない。看護って何? 上司に訴えようと陰惨ないじめにあった。仕事に誇りをもちたい。看護学校に通い、

医療や介護の現場を突き動かし、98年、福岡の10病院が抑制廃止宣言を出し、国は99年、介護保険施設で「原則禁止」とした。これで変わる、と思った。だが

福岡県の炭鉱の町、筑豊出身。15歳の春、集団就職列車で愛知県

の診療所をめざす。住み込みで掃除、洗濯。合間に准看護学校へ通う。19歳で上京。精神科病院で16年間働いた。その切ない日々が看護の原点だ。

今も、地道な取り組みの一方で少なくとも、精神病床では1万人以上

月に15回の夜勤。夜は職員2人で90人の入院者を見た。床ずれだらけの無残な最期。認知症のお年寄りが一番悲惨だった。

「おむつは肥だめ。ウンコさらい」と自らの仕事をさげすみ、弱い人を殴る同僚もいた。なぜ「やめて!」と叫んで助けなかったか。柱に縛られた人も救えなかった。「私は卑怯者です。何人もの患者さんを見殺しにした……」。

抑制廃止は「看護革命」だった。縛られているのは「仕方がない」と思い込み、あきらめていた自分たちだ!」と目覚めていった女性たち。田中さんの行動と言葉は

「刑務所はいいなあ刑期があつて」。50年前、精神病棟で出会った患者さんの声、表情がふっとよみがえるという田中さん

「私が全責任を負う。それが私の誠です」。毎朝8時前、東京都内の高齢者施設に出勤し、お年寄りや夜勤明けの職員の表情、声、花の香り、風……。現場の空気を全細胞で感じて一日が始まる。

現場で学んだのは、「誇りをもって働くには、自分に嘘をついてはいけない」ということだ。



「刑務所はいいなあ刑期があつて」。50年前、精神病棟で出会った患者さんの声、表情がふっとよみがえるという田中さん  
=いずれも中井征勝撮影

車いすのお年寄りに、「あなたを大切に思っている」と手に思いを込め全身で伝える田中とも江さん。「心底伝わればお年寄りは心が解放され自分らしく自由にいられる」という東京・品川のケアホーム西大井「うほっえん

住み込みで働きながら准看護学校へ通い始めた15歳の田中さん。気が小さく自己主張しない少女だった。本人提供

「おむつは肥だめ。ウンコさらい」と自らの仕事をさげすみ、弱い人を殴る同僚もいた。なぜ「やめて!」と叫んで助けなかったか。柱に縛られた人も救えなかった。「私は卑怯者です。何人もの患者さんを見殺しにした……」。

抑制廃止は「看護革命」だった。縛られているのは「仕方がない」と思い込み、あきらめていた自分たちだ!」と目覚めていった女性たち。田中さんの行動と言葉は

「あなたが大切に思っている」との思いを込めて、今日も全力で向き合う。  
(生井久美子)